



見る目を、 変えよう。

円形脱毛症と向き合うプロジェクト

Lilly

News
Letter
VOL.2

見る目を、変えよう。

誰もが発症する可能性のある病気「円形脱毛症」。理解を深めることで、円形脱毛症に対する、"思い込み"を"思いやり"に変えるため、リカちゃんがインタビューを行う本企画。前回は、円形脱毛症を専門とする伊藤泰介医師にインタビューを行い、リカちゃんは円形脱毛症がなぜ発症するのか、そしてその主な原因は「心の弱さじゃない」と知り、"見る目を変えること"の重要性を学びました。

※詳しくは VOL.1をご参照ください ➡ <https://kyodonewsprwire.jp/release/202208185231>

今回は、円形脱毛症を経験した、ヘッズカーフブランドのデザイナーの角田真住さんと、漫画家のかずだるまさんにリカちゃんがお話を伺い、髪を失うことの気持ちのつらさと、ご自身の活動を始めたきっかけが何だったのかを取材しました。



デザイナー・角田真住さんインタビュー ヘッズカーフに想いを込める

© TOMY



リカちゃん

1人目のインタビューはデザイナーの角田さんです。はじめまして
リカです！よろしくお願ひします！

リカちゃん、こんにちは。角田真住と申します。私は円形脱毛症を
はじめとする脱毛の悩みを抱える方に向けて、ヘッズカーフの
デザインをしています。



角田真住さん

〈プロフィール〉
本プロジェクトの公式アンバサダー。ファッションやスイーツ
が好きな好奇心旺盛な女の子。

〈プロフィール〉
円形脱毛症をはじめとする脱毛
で悩む方に向けたヘッズカーフを作っているデザイナーさん。



リカが今日着けているヘッドスカーフも角田さんがリカのためにデザインしてくださったんですよね。とってもすてきで気に入っています！角田さんがスカーフのデザインを始めたきっかけを教えていただけますか？



はい。今日、リカちゃんが身に着けてくれているスカーフも私がデザインしたもので。着けてくれてとても嬉しいです。私は36歳の時に多発型円形脱毛症を発症して、とても落ち込んでいました。しばらくは人目が気になり、外出するのも怖かったのですが、勇気を出して手持ちのスカーフを頭に巻いて出かけたところ、1人の友人から「かわいい」と褒めてもらえたことで、外出するときの憂鬱な気持ちが楽になったんです。またそのことがきっかけで、ヘッドスカーフのデザインを始めようと思うようになりました。



ヘッドスカーフをデザインするきっかけは、角田さんご自身の経験から生まれたものだったんですね。確かに友達からファッションを褒めてもらえると元気になるのはリカもわかります。



そうですね。でも最初は髪の毛が抜けてしまい、もしかしたらストレスを抱えているのかもと不安になったり、自分の見た目がみるみる変わっていく様子にとても戸惑いを感じました。私に何と声をかけていいのかわからずに戸惑っている周りの人たちの姿や、心配をかけてしまっている家族の姿を見て、心が苦しくなったりもしました。



そうですね、自分だけではなく、周りの方の反応も気にしてしまいますよね……。角田さんは、今はデザイナーとして活躍されていますが、どのような気持ちで同じく悩んでいる皆さんと接していますか？



はい、私の場合はオシャレをすることで前向きになれたので、この気持ちを同じ症状を持つ方にもお伝えできたらと思いながら、いつも活動をしています。今まで出会った方の中には、脱毛症の恋人に私が作ったスカーフをプレゼントされたという方もいて、今まで幸せな気持ちになりました。世の中に円形脱毛症への理解が進み、患者さんと周囲の人たちが想い合えることがとても重要なと感じています。だから今日は私も想いのこもったスカーフをリカちゃんに身に着けてもらえてとっても嬉しいです！



角田さんの活動を通じてみんなの理解が進み、今悩んでいる人たちが、悩みを隠すためではなく、人生を楽しむためのファッションができるようになるといいですね。今日はどうもありがとうございました！

漫画家・小豆だるまさんインタビュー 自身の体験談が悩む人の心を軽くする



次は小豆だるまさんへのインタビューです。
はじめまして。リカです。小豆さんは、漫画家さんなんですよ！？

リカちゃん、今日はよろしくお願いします！小豆だるまです。私はエッセイ漫画家で、自身の経験を活かし、円形脱毛症に関するのことを漫画にする活動もしています。このニュースレターにも漫画が載っているので、ぜひ読んでくださいね。



小豆だるまさん

〈プロフィール〉
円形脱毛症についてエッセイ
漫画を描いている漫画家さん。



はい！小豆さんの漫画、とても読みやすくて勉強になりました。
今日は、円形脱毛症に関して、小豆さんのご経験を聞かせていただけますか？

私が円形脱毛症を発症したのは34歳の時でした。髪の毛が抜け落ちていく状況は、自分でも受け止められなくて本当にショックで……。この先どうなるのだろう？という不安と、恥ずかしい気持ちが重なって、人に相談しにくかったことを覚えています。



そうなんですね……。どのようにして症状と向き合っていったのか、お聞きしてもいいですか？

円形脱毛症を発症したとわかった時はつらい時期を過ごしましたが、少し気持ちが落ち着いてきてからは、自分の中で区切りをつけるために、円形脱毛症になった自身の体験談を漫画にする活動を始めました。また漫画家として同じく悩める人の力になれたらいいなと思っていました。





人に言えない悩みを漫画にするってすごく勇気がいりますよね！
読者の方からはどのような反応がありましたか？

気持ちをわかってもらえて、ありがとうございます。確かに「円形脱毛症」と言うと深刻になりがちなテーマですが、少し肩の力を抜いて向き合う時間があってもいいのではと思い、「あるあるネタ」などを漫画で描いたところ、共感してもらえるような反応があって非常に嬉しかったです。「一人で抱えていた気持ちが軽くなった」と言っていただくこともありました。症状との向き合い方は人それぞれで「こうするのがいい」という正解はないからこそ、誰かの体験が悩んでいる別の誰かの励みになると思っています。漫画を通して、より多くの人に、その想いを伝えることができたらいいなと思っています。



患者さんの気持ちを軽くできる漫画。小豆さんだからこそ描ける、大切なお仕事ですね。リカも今回、『見る目を、変えよう。』プロジェクトのアンバサダーになって、円形脱毛症の症状のこと、この病気で悩んでいる皆さんの気持ち、初めて知ることができました。患者さんが自分らしく過ごせる世の中のため、リカにもできることがないか、考えてみたいと思います。今日はお話を聞かせてくださいありがとうございました！

「見えない境界線」

髪を失った喪失感にさいなまれる患者さんに、私たちができるることは何でしょう。今回、円形脱毛症を経験したお二方のインタビューで共通する点は、周囲とのコミュニケーションを通じて気持ちが楽になったということでした。円形脱毛症に限らず、誰かがつらい気持ちになっている時に、そっと寄り添うことが重要なかもしれません。

日本イーライリリーでは、円形脱毛症への“思い込み”を解き、世間からの視線に苦しむ患者さんを取り巻く社会を少しでも“思いやり”的な環境に変えていきたいという思いから、VOL.1に続き、小豆だるまさんから円形脱毛症のエピソード漫画を寄せていただきました。

